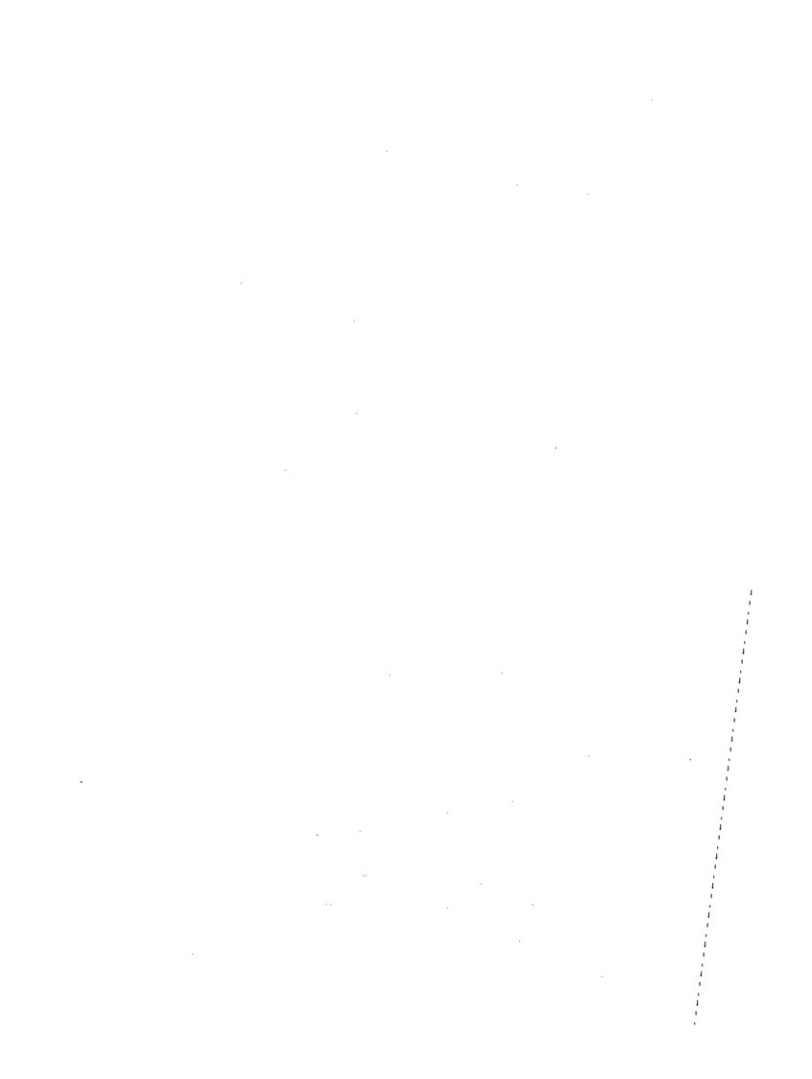


大分県上下田遺跡

第2次発掘調査報告書

別府大学付属博物館

1983



大分県上下田遺跡

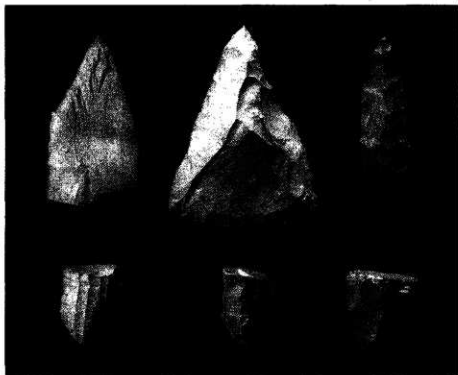
発掘調査報告書

昭和58年

別府大学付属博物館



銅片と石核の接合資料（上下田Ⅱ）



細石杖，掘器・削器，槍先形尖頭器（上下田Ⅰ）



尖頭状掘器と削片の接合資料（上下田Ⅱ）

はじめに

大野川の流域は、東九州の地域のなかで、旧石器時代の遺跡が数多く見られる地域として注目されている。この大野川流域でも、大野町・三重町・清川村を中心とする中流域はとくに集中している。大野川に接する段丘上に立地する清川村の岩戸遺跡、三重町の百枝小学校遺跡、200～300mの台地上に占地する大野町の大塚遺跡・今峠遺跡・宮地前遺跡などは、大野川中流域の代表的な遺跡である。これらの諸遺跡は発掘調査や試掘調査の実施で、石器群の出土層位や石器組成などがしだいに明かにされつつある。いっぽう、これらの調査と併行して、大野川流域の表面採集による分布調査が進められている。分布調査によって100箇所を越える旧石器時代の遺跡が確認されており、採集資料の数も膨大な量になっている。あらためて、当流域に旧石器時代の遺跡がきわめて高い密度で密集していることを具体的な資料で知ることができる。別府大学付属博物館では大野川流域、とくに中流域を旧石器時代の一つの調査対象地域に設定して研究活動を続けている。

今回の上下田遺跡の第2次発掘調査は、別府大学付属博物館が「大野川流域における先史時代の調査研究」のテーマに基づいて実施したものである。第1次発掘調査は昭和55年2月25日から3月5日までの10日間と、同年4月7日から4月11日までの5日間実施している。



大野川中流域

1 調査の概要

(1) 上下田遺跡の第2次発掘調査は昭和56年3月7日から3月13日までの7日間実施した。

(2) 遺跡は大分県大野郡三重町大字川辺に所在し、大野川に隣接する段丘上に立地している。標高は93mで、大野川河床との比高は約17mを計ることができる。

(3) 発掘調査面積は、遺跡の広がりを確認するためのテストピット、第1次発掘調査を含めて約70㎡であり、そのうち遺物が確認されたのは約50㎡の範囲であった。

(4) 上下田遺跡の文化層は3枚認められる。第II層に縄文時代早期文化、第III層から第IV層にかけて旧石器時代終末期の細石器文化（上下田Ⅰ文化）、第V層に後期旧石器時代より古い時期と判断できる石器群（上下田Ⅱ文化）である。

主体を占めるのは細石器文化の石器群で、代表的な遺物として細石刃・細石核、搔器・削器などがあり、これらの石器群はソフトローム層およびその漸移層から出土している。

第V層の褐色～青灰色粘質土層出土の石器群は第2次調査において新たに発見されたものであり、安山岩の尖頭状礫器・剝片・石核が出土している。

(5) 細石器文化の石器群の石材はその大半が無斑晶流紋岩（流紋岩）で占められており、これらの石材のあり方は大野川中流域における細石器文化をはじめとする後期旧石器時代の諸遺跡の状況と符合している。

いっぽう、第V層出土の石器群の石材はすべて風化の進んだ安山岩であり、流紋岩は用いられていない。

(6) 上下田遺跡の主体をなす細石器文化の時期については、層位および石器群のあり方からおよそ13,000年前が考えられよう。

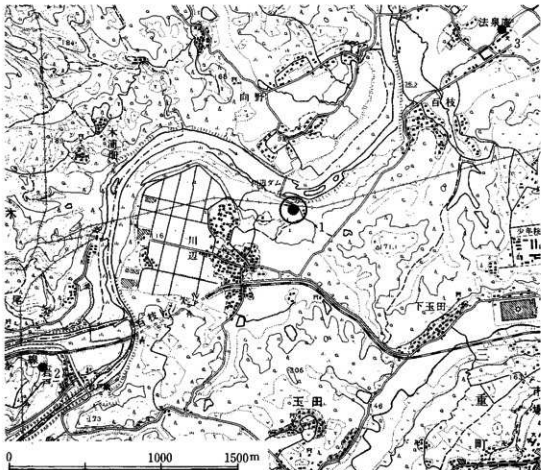
第V層の石器群の時期については、出土層位が阿蘇4（Aso-4）と呼称されている溶結凝灰岩最上面の風化粘土化した土層中であること、大野川流域の後期旧石器時代の石材として普遍的に使用されている流紋岩と異なる安山岩が石材に用いられていること、それに定型的な縦長剝片の剝離技術が認められないこと、などの理由から30,000年よりも古い年代が予想される。しかしながら明確な時期については不明である。

2 遺跡

遺跡の位置



第1図 上下田遺跡の位置



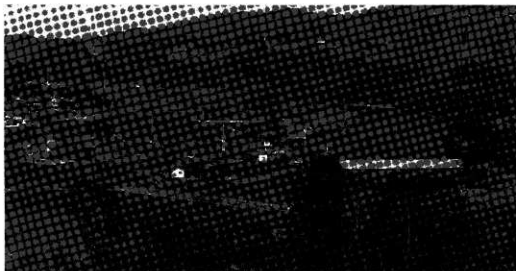
第2図 上下田遺跡周辺の地形 1.上下田遺跡 2.岩戸遺跡 3.百枝小学校遺跡

遺跡の環境

阿蘇の外輪山および祖母・傾山系の北麓に源を発する大野川は大分県のほぼ中央を東流し、別府湾に注いでいる県下最大の河川である。この大野川は中流域で緒方川と奥嶽川を従えているが、奥嶽川と合流する地点で直角に流れをかえて北流し、さらに上下田遺跡が所在する川辺地区を大きく迂回して再び東へと流れをかえている。流れがかわる個所に川辺ダムのえん堤が築かれている。

遺跡はこのダムに隣接する段丘上に営まれている。標高は93mで、大野川の現河床面との比高は約17mを計ることができる。遺跡の中心部から大野川までの最短距離はわずか10数メートルである。現在の川辺地区の集落は100～110mの平坦な台地上に営まれており、遺跡はこれよりやや低く、浅い谷状の川岸に立地している。この立地が大野川中流域の旧石器時代の諸遺跡で一般的に認められるような発達した土層の堆積状況がみられない理由であろう。

清川村・大野町・三重町を中心とする大野川中流域は河岸段丘や開析の進んだ台地が形成されており、これらの段丘や台地上には旧石器時代の遺跡群が数多く存在している。上下田遺跡の西南2kmには昭和42年大野川中流域での最初の本格的な発掘調査が実施された岩戸遺跡が所在している。一方、下流にあたる北東1.8kmには多量の石器類と礫群(集石)が出土した百枝小学校遺跡があり、共に東九州における旧石器時代の代表的な遺跡である。さらに、上下田遺跡の対岸にあたる大野町の大野原台地には大塚遺跡・宮地前遺跡・今幹遺跡などの旧石器時代の遺跡群が集中している。



遺跡の遺景

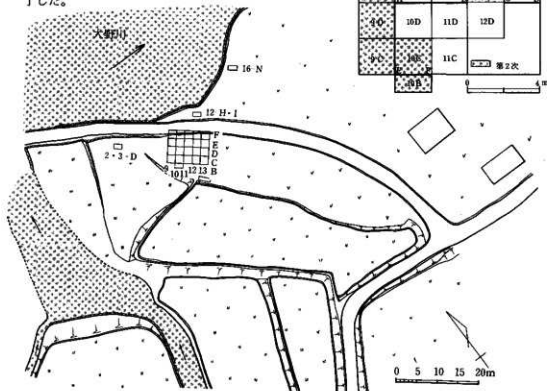
調査区の設定

上下田遺跡の調査区の設定は発見の契機となった約1.4×3.3mの楕円形の土取りのための穴を含めて、川よりの北西から南東に向けて1・2・3……19、これに直交する南西から北東へ向けてA・B・C……Nと、2×2mを単位とする調査網を第1次発掘調査の時点で設けた。

第1次発掘調査では11-C、10-D～12-D、10-E、11-E・13-E、ダムへの道路に接する10-F・11-Fの一部、それに遺跡の広がり把握するために発掘可能な限りでもっとも川よりの2・3-D、道路をへだてた12-H・I、16-N、これらと反対側の南の1段低くなった畑地のB調査区で実施した。

第2次発掘調査は第1次発掘調査の時、時間的な制約で発掘が実施できなかった川よりの9-C～9-F、10-C・10-B、12-E・12-Fの8調査区で行った。このうち9-F、12-Fの約半分は道路・側溝にかかって発掘は不可能であった。

上下田遺跡の発掘の総面積は第1次・第2次を合わせて約70㎡となり、そのうち実質的な成果が認められたのは約50㎡である。第1次・第2次の2回の調査において、上下田遺跡で遺物が含まれると予想される範囲については発掘の可能な限りほぼ調査を完了した。



第3図 上下田遺跡の地形・調査区の配置

層序と遺物包含層

上下田遺跡は大野川に隣接する段丘の浅い谷状の位置に立地しているため、大野川中流域の旧石器時代の諸遺跡で一般的に認められるような発達した土層の堆積状況がみられなかった。

上下田遺跡の土層の基本的な堆積状況は以下のようにⅠ層からⅤ層に区分される。

第Ⅰ層 黒色をしたやわらかい耕作土層で火山灰と腐植土からなっており、厚さは15～20cmである。この下位には青灰色をした粘土質土層とさらに酸化鉄を多量に含む青褐色をした固い粘土質の土層が15cm内外堆積しており、かつて水田耕作が行われていたことを物語っている。

第Ⅱ層 黒褐色土層でⅠ層に比べるとややしまっている。厚さは10～15cmである。この層から若干の縄文時代早期の小さな土器片と石鏃・剝片類・小さな鏝、それに縄文時代より以前の所産と判断される石器類が出土している。本来縄文時代早期の包含層が存在していたとみなすことができよう。しかし、土器片がローリングを受けて細片化していることや鏝が散在していること、さらにそれ以前の石器類が混入していることなどから、水田経営が営まれる前はこのⅡ層からⅢ層にかけて畑地として耕作されていたものと考えられる。

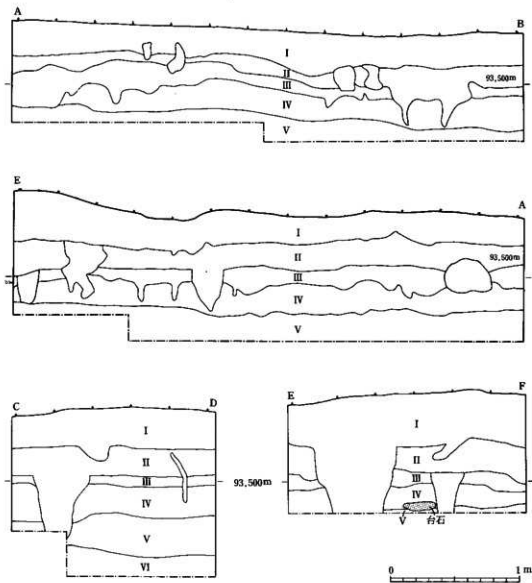
第Ⅲ層 茶褐色をしたローム質の土層でⅣ層への漸移層である。厚さは約20cmあり、色調は上部で黒味をおびており、下部につれて次第に黄色を増している。第1次の調査区では、Ⅲ層の上面に若干の縄文時代の遺物が出土しているが、それ以外はすべて旧石器時代終末の所産と考えられる石器類である。

Ⅳ層 黄褐色をしたローム層で、一般にソフトローム層と呼ばれている土層に相当するものであり、厚さは30cm前後である。Ⅲ層との境界は明瞭でない。Ⅳ層のソフトローム層中には硬い土がブロック状に含まれている。Ⅲ層出土と同様な石器類がこの層の上部に集中して出土しており、下部につれて数量を減ずる。

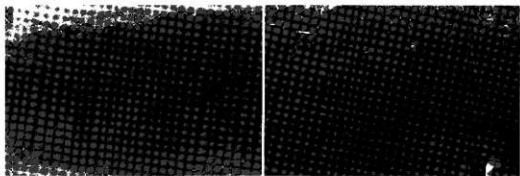
第Ⅴ層 褐色～青灰色をした粘質の強い土層で、Ⅳ層に比較して固くしまっている。大野川中流域で一般に知られるハードローム層とは異なっている。すなわち、この層の上位は褐色を呈しているが、漸次色調が青灰色に変化し、粘質も一段と強くなり、風化した鏝が含まれている。この鏝もいわゆる河川の円鏝ではなく、凝灰岩質の風化した鏝と考えられるものであり、Ⅴ層そのものもこれら凝灰岩質の鏝が風化粘土化したものであろう。厚さは30～40cmあり、この層から安山岩の石器・剝片それに石核が出土している。Ⅴ層出土の石器群は第2次調査において確認されたものであり、Ⅲ層からⅣ層上部にかけて出土している流紋岩製の細石器文化の石器群とは異なる文化の所産と判断される。

第Ⅵ層 Ⅴ層下部の傾向が一段と強くなり、おそらく「Aso-4」の溶結凝灰岩に達するのであろう。

上下田遺跡ではアカホヤ(Ah)、始良丹沢バミス(AT)、黒色帯(暗色帯)などの基準となるべき土層が確認できず、全体的に火山起源の降下堆積物の発達は乏しいといわざるを得ない。



第4圖 土層断面図



土層断面

遺物の遺存状況

層	細石刃 スポール	細石核	削器 播器	尖頭形 彫器	2次 加工	使用痕	敲石 磨石	磨石 ブランク	調整 剥片	剥片 碎片	礫	石核	尖頭状 礫器	礫器	台石	不明	石敷	土器	計	
I-II	13		3			3	2			122	50	2					2	3	7	207
III	26	4	9	1	2	1	4	2	3	245	4	1				2	1	6	311	
IV	36	3	5	1		4	6	11	4	1	171	12	2		1	6	1		1	265
V	2						1	2			38	1	1	1						46
計	77	7	17	2	2	5	14	17	7	1	576	67	6	1	1	6	5	4	14	829

第1表 上下田遺跡各層出土の遺物（第1次、第2次）

上下田遺跡出土の遺物は、第II層と第III層上面において縄文時代早期の土器と石器類が少量であるが第1次発掘調査で確認されている。土器は無文土器と押型文土器の14点である。口縁部や底部などの特徴を示すものは1点も出土してなく、いずれも小破片である。石鉄は4点出土しており、その中には縄文時代早期の押型文土器群に普遍的に共存する鉄形鉄がある。II層からIII層の上部にかけて、比較的広い範囲にわたって安山岩質の拳大の礫が出土している。これらの礫には火を受けたため変色あるいは破損したものが含まれており、縄文時代早期の集石炉が2次的な攪乱によって散在したものと考えられる。この攪乱は局部的にIII層下部にまでおよんでいる。そのため第II層および第III層上面には、本来第III層下部から第IV層上部にかけて包含されていたと判断できる細石器文化の石器群が一部遊離して混在している。すなわち、細石刃やスポール、それに細石核の調整剥片などが出土しているのである。

第III層から第IV層上部にかけては、旧石器時代終末の細石器文化の石器群が比較的良好なまとまりをもって遺存している。細石刃・スポールをはじめとして、細石核・ブランク、スクレイパー（播器・削器）、それに敲石・磨石・台石などが主要遺物である。また剥片や破片などもIII層下部からIV層上部にかけて多量に出土している。これらの石器群が細石器文化期での1文化層、1生活面の所産として把握することができるかどうかは重要な問題である。この点については、石器群の平面分布と垂直分布との照合、接合資料、それに第III・IV層中での石器群の深さによる出土頻度と敲石・台石それに火を受けた礫の遺存状況などから判断して、1文化層・1生活面として考えたい。

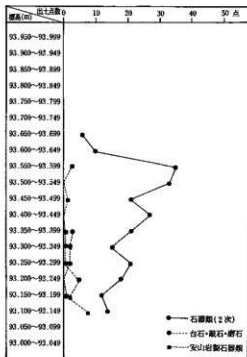
今回の第2次発掘調査で、第V層中において、40点ほどの安山岩製の尖頭状礫器・剥片・石核が出土している。これらの石器群は限られた調査区のみから出土しており、その広がりも狭いものと考えられる。遺物の遺存状況については、垂直分布および平面分布の面から触れることにする。

遺物の垂直分布

上下田遺跡出土のすべての遺物の垂直分布を5cm毎に区分して断面地層図に投影した。その結果出土遺物の深度にかなりの幅がみられるが、これは包含層からの2次的な遊離と包含層の傾斜に大きく起因している。このため遺物の出土深度の幅が広く、しかも各グリッドの土層の厚さが一定でなく、その上多少の凹凸があることも関係している。しかしながら大むね以下のような傾向を把握することができる。

上下田遺跡上層の細石器文化の石器群は第三層の漸移層から第四層のソフトローム層の上部にかけての約30cmに集中して発見されている。これに対して、台石・敲石・磨石、それに拳大よりやや大きな鏃などは、石器群が最も集中する深度より10～15cm下位において出土している。台石・敲石・磨石などの大形の石器が細石器文化が営まれた時期の地表面を示唆するものであれば、小形の石器群の大半は当時の生活面から上位に遊離していることになる。これとは逆に大形の石器と同じレベルもしくはそれよりも下位にもぐっているものも多少みられる。

上下田遺跡ではIV層上部の細石器文化の時期と異なるもう1つの文化層が第V層に認められる。出土した石器群の数は少なく、しかも平面的な広がりも限られているが、第V層の上部から中部にかけて、安山岩製の石器群の最大値がみられる。この石器群の1部は第四層にも、また第V層の下部にも出土しているが、本来の生活面は第V層の上部から中部に存在したものと考えられ、上位の細石器文化石器群の垂直分布の最大値と異なっており、垂直分布の上で区分される。



第5図 遺物の垂直分布図 (第2次調査)

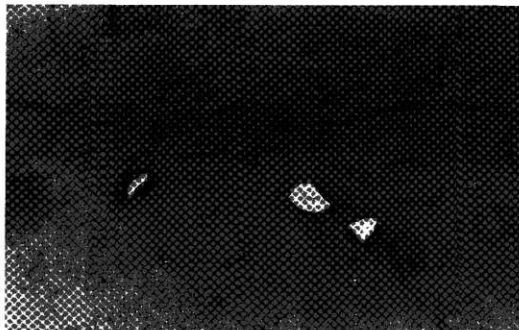
遺物の平面分布

細石器文化の石器群が出土したのは9-Cから9-F、10-Bから10-F、11-Cから11-F、それに12-D・12-Eの15調査区である。しかしながら9・10・11-Fの北側は道路にかかっており、また9・10・11-Eの大半は土取りのためにV層上部まですでに削平されていた。このため上下田遺跡の石器群のブロック (ユニット) の把握は困難といわざるを得ない。しかしながらある程度までは石器群の集中する地点とその広がりを予測することができそうである。

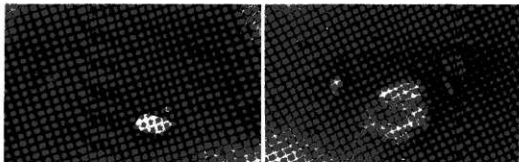
その1つは10-D・10-C・10-B・9-Dの調査区、すなわち全体の調査範囲の西側の部分である。その大きさは短軸が約4m、長軸が約5.5mの楕円形の広がりである。長

軸の方向での接合資料がみられる。ただ長軸の北東の端は土取りのため不明である。今1つは、11-F・11-E調査区であり、この両地区は第1次調査において確認したものである。北側は道路になっていて調査が不可能であり、南西は土取りのために失われており、その広がりについては確かめようがないのである。そこで東側にあたる12-F・12-E調査区を第2次調査の発掘対照とした。しかしながら12-Fではまったく遺物の出土はなく、12-Eでも隣接した地点では遺物は発見されなかった。東および西側に大きく広がらないことから、短軸約2.5m、長軸4m前後の小さなブロックを推測することができそうである。

第2次調査では、調査区南西の10-C・10-8において、安山岩の石核・剥片・尖頭状石器などの石器群が発見された。それらの石器群は長軸が約3m、短軸が約2mのきわめて狭い範囲に存在していた。10-Bの北側が未調査のため、その広がりは明確にできないが、北をのぞく3方の状況からすると、3×2mの範囲からそれほど広くならないものと推定できる。平面分布は垂直分布と同様に、細石器文化のブロックと多少ずれている。



細石核・剥片の出土状況



台石の出土状況

上下田遺跡出土の旧石器時代の石器群

層	細石刃 スポール	細石核	削器 挿器	尖頭器	彫器	2次 加工	使用痕 剥片	敲石 磨石	素材	櫛状 剥片	剥片 砕片	礫	石核	尖頭状 挿器	挿器	台石	不明	計
Ⅲ	9	2	5		1				1		67							85
Ⅳ	11	1		1			1	8			65	6			1	5		99
Ⅴ	2					1	1	1			38	1	1	1				46
計	22	3	5	1	1	1	2	9	1		170	7	1	1	1	5		230

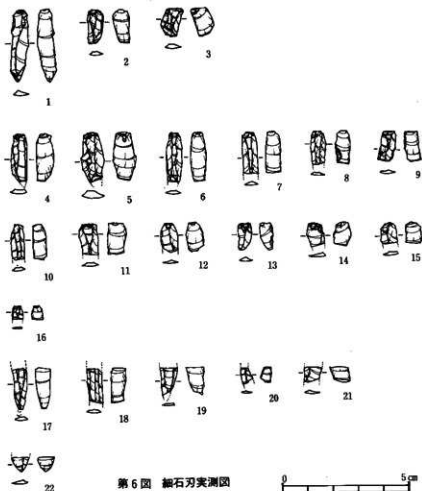
第2表 上下田遺跡出土の遺物（第2次調査）

第2次発掘調査において出土した石器群は、すべてで231点である。出土層位は第Ⅲ層から第Ⅳ層にかけてと、第Ⅴ層中との2つがある。出土総数の約 $\frac{3}{4}$ は第Ⅲ・Ⅳ層中からであり、主要な石器類としては細石刃・細石核、挿器・削器、敲石・台石などである。このほか、数は少ないが槍先形尖頭器、彫器、礫器などが出土している。これらの石器類の種類および出土層位は第1次発掘調査と全く符合しており、上下田遺跡の主要な石器文化が旧石器時代終末の細石器文化の時期に帰属することが第2次発掘調査で再度確認されたことになる。ごく一部であるが、細石器文化の所産である石器が第Ⅴ層の上部において発見されている。おそらく第Ⅳ層中にあったものが2次的な作用を受けて下層に入り込んだものであろう。

第Ⅲ層および第Ⅳ層から出土している細石器文化の石器群の中で、細石刃をのぞくと、挿器・削器、敲石・磨石、それに台石の存在が大きいのである。挿器・削器については大野川中流域の「船野型細石核」を主体とする細石器文化の特徴的な石器として以前から注目されていたのである。敲石・磨石・台石についても細石器文化の石器組成の重要な一員であることが如実に示されている。以上の石器以外はいずれも1～2点であり、とりわけ2次加工の不定形な剥片石器や使用痕のある剥片などの少なさが目を引く。

今回の第2次発掘調査において、第Ⅴ層から安山岩製の石器類が40点ほど出土している。石器類の種類は尖頭状挿器1点、剥片38点、石核1点である。このうち、尖頭状挿器と剥片が接合し、また9点の剥片と石核が接合している。これらの石器群はいずれも安山岩製であり、第Ⅲ層・Ⅳ層出土の石器群の大多数が流紋岩で占められているのと大きく異なっている。また、剥片と石核の接合資料の観察による限り、大野川流域の後期旧石器文化に普遍に存在する縦長剥片剥離技術が認められないのである。さらに第Ⅴ層がAso-4の最上面が風化粘土化した土層と考えられる地層から出土していることから、第Ⅲ層から第Ⅳ層にかけてが主要な包含層とみられる細石器文化の石器群とは明らかに異なる石器群と考えたい。

細石刃



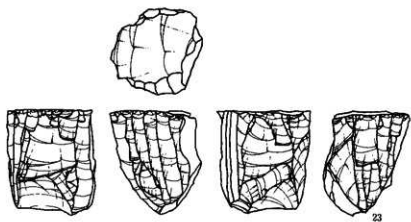
第6図 細石刃実測図

第2次調査において、22点の細石刃が出土している。石材は黒曜石・チャートの各1点をのぞくといずれも流紋岩製である。細石刃の長さは最大2.9cm、最小0.6cmと両者に大きな開きがある。いっぽう幅については1.0cm～0.5cmとなっている。

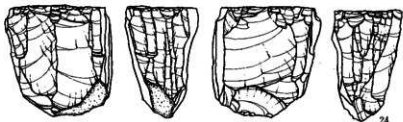
細石刃は、完形品が3点出土している。そのうち2点は最大長が1.3cmと1.1cmで、細石核の細石刃剝離作業面の高さ(長さ)の2.3cm～3.1cmと開いている。頭部は13点出土しており、最大2.0cm、最小0.5cmである。ただこの頭部では末端の一部をわずかに欠損したものと、逆に大部分が折断されていて打面近くが残されたものが存在している。前者のみに限定しても2.0cmが1点あるのみで、ほかはそれよりも短かく、細石刃として実際の使用に耐えるものはきわめて少ないとみなされる。中間部は5点で、最大1.6cm、最小0.6cmである。これらの中間部の細石刃はすべて両端が意図的に折断されて使用されたかどうかは不明である。末端部は1点のみ出土している。

	No	層	調査区	石 材	長(cm)	幅(cm)	重(g)	部 位	図版番号
細石刃	1	Ⅳ	10C	流紋岩	2.9	0.8	0.42	完形品	6
	2	Ⅴ	10C	〃	1.3	0.6	0.15	〃	〃
	3	Ⅳ	10C	〃	1.1	0.9	0.17	〃	〃
	4	Ⅳ	9 D	〃	1.9	0.7	0.22	尾部欠損	〃
	5	Ⅲ	10C	〃	2.0	1.0	0.54	〃	〃
	6	Ⅳ	9 D	〃	1.9	0.6	0.22	〃	〃
	7	Ⅲ	10B	〃	1.1	0.6	0.20	〃	〃
	8	Ⅳ	10B	〃	1.3	0.6	0.15	〃	〃
	9	Ⅲ	10B	〃	1.2	0.7	0.13	〃	〃
	10	Ⅳ	10C	〃	1.4	0.5	0.12	〃	〃
	11	Ⅳ	10C	〃	1.2	0.8	0.21	〃	〃
	12	Ⅲ	10B	〃	1.2	0.7	0.13	〃	〃
	13	Ⅴ	10B	黒曜石	1.0	0.5	0.06	〃	〃
	14	Ⅳ	10C	流紋岩	0.9	0.8	0.10	〃	〃
	15	Ⅲ	12E	〃	0.8	0.6	0.06	〃	〃
	16	Ⅳ	9 D	〃	0.5	0.5	0.19	〃	〃
	17	Ⅲ	9 D	〃	1.6	0.6	0.17	中間部	〃
	18	Ⅲ	9 D	〃	1.5	0.7	0.18	〃	〃
	19	Ⅳ	10C	〃	1.1	0.7	0.08	〃	〃
	20	Ⅲ	9 D	〃	0.7	0.5	0.22	〃	〃
	21	Ⅳ	10C	チャート	0.6	0.8	0.08	〃	〃
	22	Ⅲ	9 D	流紋岩	0.6	0.7	0.04	頸部欠損	〃

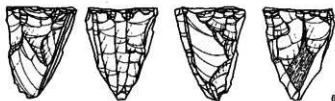
第3表 上下田遺跡出土の細石刃計測表



23



24



25



第7图 细石核实例图

細石核・ブランク

上下田遺跡の第2次調査で、3点の細石核と2点の細石核ブランクが出土している。第1次第2次調査を合わせると、細石核7点、ブランク7点である。石材は流紋岩が12点、チャートが2点で、やはり大野川流域の後期旧石器文化にふさわしく、流紋岩が卓越している。細石刃では黒曜石のものが1点出土しているが、細石核・ブランクにはみられない。

23 流紋岩の厚味のある剥片が素材に用いられ、しかもその剥片の主要剥離面がそのまま細石核の打面に用いられる。側面の調整は打面倒とその反対側の方向からそれぞれ大きな剥離によって整えられている。細石刃剥離作業面は両端の2面に設けられている。打面は平坦打面で、剥離作業面との角度は85°と、ほぼ直角である。

24 やはり両端の2面に細石刃剥離作業面をもつ細石核で、素材、側面調整、打面などは23と全く同様であり、いわゆる「船野型細石核」の特徴を示している。

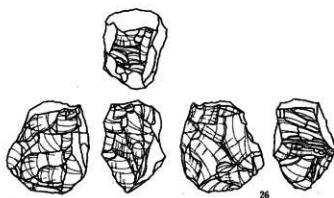
25 全体の形状は角錐形を呈し、先の2点の角柱形のものとは異なっている。しかしこれは細石刃剥離作業が進行して、残核に近いためである。基本的には23・24と同様な特徴をもつ「船野型細石核」である。ただ違う点としては細石刃剥離作業面が一端にのみ存在することである。

26 この1点のみがチャート製の細石核ブランクである。小さな素材のほぼ全面に周辺からの大小の剥離を施して、両面加工石器に類似したブランクを作っている。打面も正面および背面方向からの調整剥離が行われている。また、打面の端部から背面に向かって大きく傾斜している。明確な細石刃剥離作業面が観察されないでブランクとした。

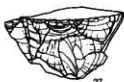
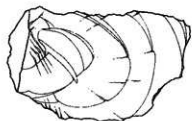
27 船野型細石核のブランクと考えられるものである。厚味のある縦長剥片を素材に用いていることが明瞭である。素材となった剥片の主要剥離面を打面にして側面調整が施され、剥片の打面倒と反対の一端に細石刃剥離作業面が準備されている。26のブランクとは全く異なる細石核の製作過程が示されている資料である。

上下田遺跡の第2次調査で出土している細石核3点はいずれも船野型細石核と判断できるものであるが、ブランクの1点に船野型とはその製作技術・石材で異なるものが存在している。異なる1点のブランクについては、長崎県の福井洞穴などで多量に出土している「舟底型・半舟底型」と一般に呼称されている、いわゆる「福井型細石核」に類似している。

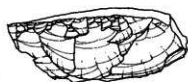
第1次調査でも、上下田遺跡で主体的な船野型細石核にまじって数点の福井型細石核が出土しているのである。このことは上下田遺跡上層の細石器文化の性格や編年的位置づけを考える上で1つの示唆を与えるもののように思える。



26



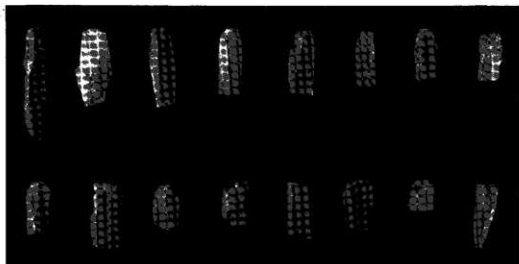
27



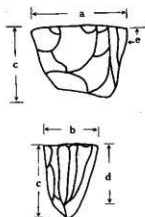
第8図 ブランク実測図

	No	層	調査区	石材	(a) 長(cm)	(b) 幅(cm)	(c) 高(cm)	(d) 正面高	重(g)	(e) 角度	図版番号
網石核	23	Ⅲ	9 D	流紋岩	3.1	3.8	3.5	3.3	37.21	85°	7
	24	Ⅳ	10 C	〃	3.2	2.3	3.6	3.5	35.86	83°	〃
	25	Ⅲ	10 C	〃	2.3	2.2	3.0	2.9	16.88	75°	〃
ブランク	26	Ⅱ	12 F	チャート	3.1	2.0	2.9		19.99		8
	27	Ⅲ	10 C	流紋岩	6.0	4.0	2.0		55.44		〃

第4表 上下田遺跡出土の網石核・ブランク計測表



細石刃



細石核・ブランクの計測位置



細石核・ブランク

掻器・削器 (スクレイパー)

28 比較的大形でしかも厚味のある流紋岩の縦長剥片を素材に、その1側辺に沿って主要剥離面側に丹念な2次加工が施されている。全体の形はほぼ長2等辺三角形を呈し、先端は尖っている。基部は素材となった剥片の平担打面が残っている。

29 不定形な横長の剥片が素材で、打面側とは逆な1辺の大剥離面側に2次加工が施され、鋭利な刃部が作られている。全体の形は長方形に近い。流紋岩製。

30 1面に表皮を残している厚味のある不定形な剥片を素材に、その1側辺に2次加工が施されている。

31・32 不定形な小形の剥片の1部に部分的な2次加工が施されている。スクレイパーと考えられる石器である。31はサヌカイト質の石材で、表面は風化が著しい。32は珪質岩と考えられるもので、当遺跡出土の石器群にあって稀な存在である。

槍先形尖頭器

33 柳葉形の槍先形尖頭器で、基部側が一部欠損している。両面とも両側辺からの2次加工が全面におよんでおり、横断面はやや角ばった凸レンズ状を呈している。上下田遺跡では第1次調査においてやはり1点槍先形尖頭器が出土している。石材は他の大部分の石器と同様、流紋岩である。

彫器

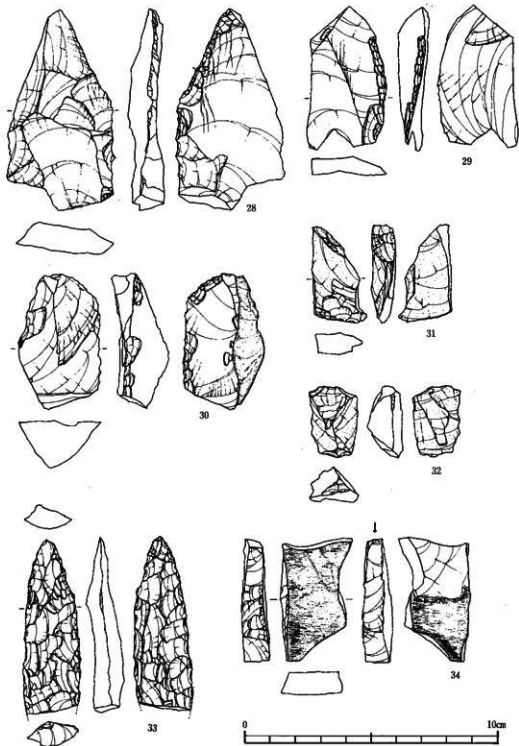
34 板状の流紋岩を素材に用いた彫器で、彫刀面は1側辺に沿って1面施されている。彫刀面の打面はアクシデントで折れたと考えられる平坦な面をそのまま利用しており、「単打彫器」として分類されるものである。彫刀面と反対側の側面には、ナイフ形石器の刃潰しを彷彿させる急角度の加工が施されている。この石器の表面ならびに裏面の大部分は風化が著しい。

礫器

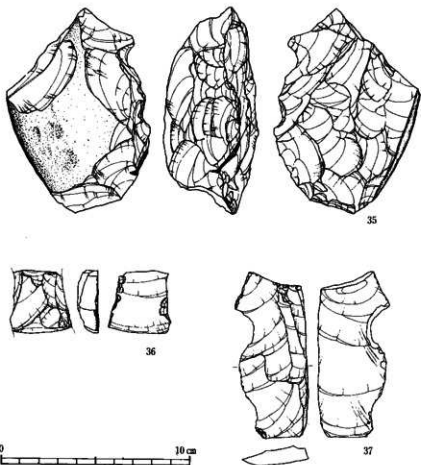
35 拳大よりやや大きめの流紋岩の円礫を半截したものを素材に用いたと考えられる礫器である。1面は一部をのぞいて周辺からの大きな剥離によって全体の形を整えているが、素材となった円礫の表皮が残されたままになっている。逆の1面は周囲から加工が全面におよんでいる。尖りぎみの先端とそれに連なる1側辺に鋭い刃部が形成されている一種のチョッピングツールである。

2次加工の剥片

36・37 流紋岩の縦長の剥片の側縁に局所的な2次加工あるいは使用によると考えられる小さな刃こぼれが観察される石器である。



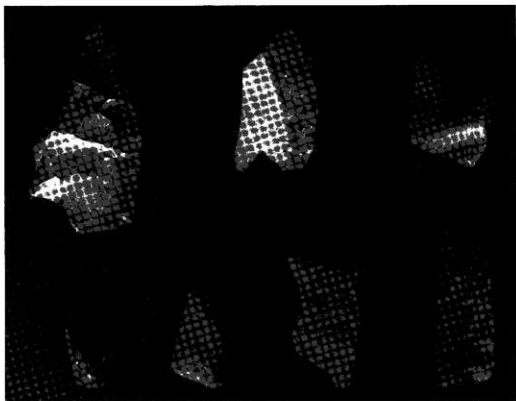
第9图 投器・削器・槍先形尖頭器・形器尖測図



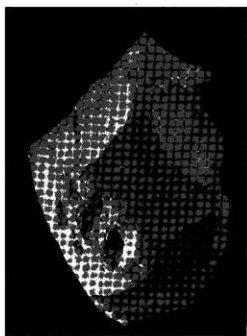
第10図 礫器・2次加工の制片実測図

	No	層	調査区	石 材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	図版番号
礫器・削器 (スクレイパー)	28	Ⅲ	12E	流紋岩	8.1	4.3	1.3	39.59	9
	29	Ⅲ	10C	〃	5.8	3.3	0.8	17.87	〃
	30	Ⅲ	10C	〃	5.4	3.3	1.8	31.23	〃
	31	Ⅲ	10C	安山岩	3.9	2.2	0.8	8.20	〃
	32	Ⅲ	9F	〃	2.8	1.9	1.3	6.83	〃
	槍先形尖頭礫	33	Ⅳ	9C	流紋岩	6.4	2.8	1.2	19.21
彫 器	34	Ⅲ	9D	流紋岩	4.9	2.9	1.0	17.56	9
礫 器	35	Ⅳ	10C	流紋岩	10.9	7.6	5.1	9	10
2次加工の 制 片	36	Ⅳ	10C	流紋岩	3.4	3.3	1.2	14.0	10
	37		表採	〃	8.9	3.8	1.1	40.4	〃

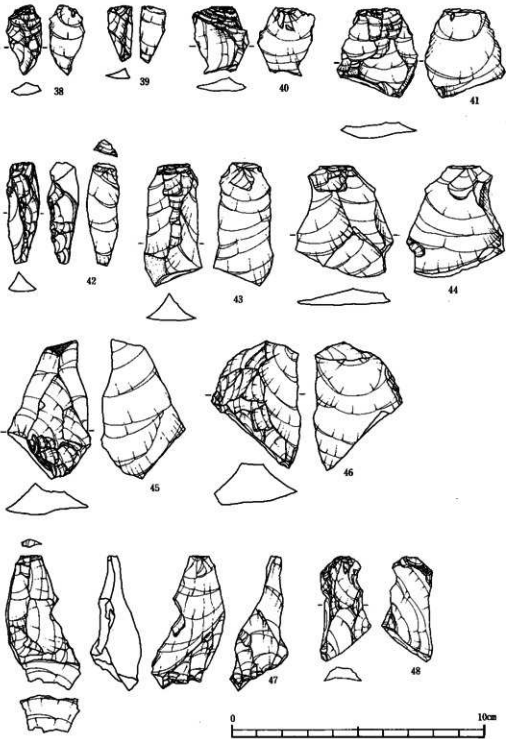
第5表 上下田遺跡出土の石器計測表



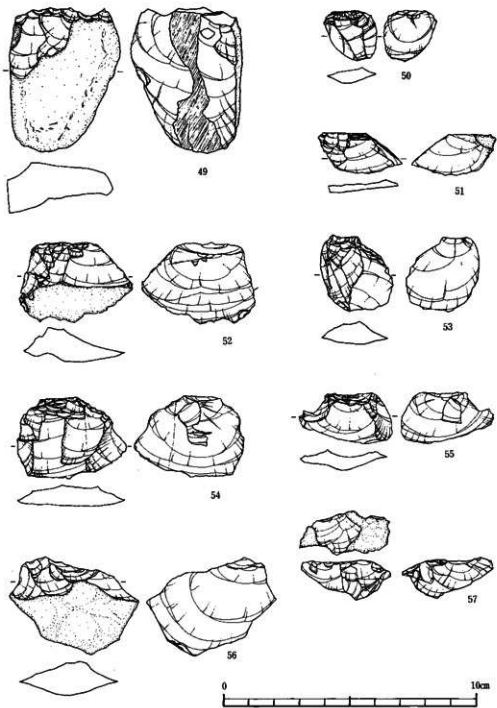
振器・削器、彫器、槍先形尖頭器



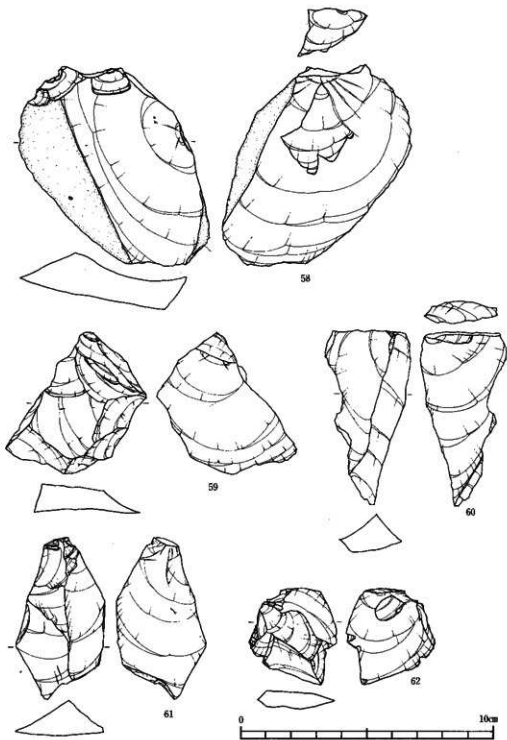
破 器



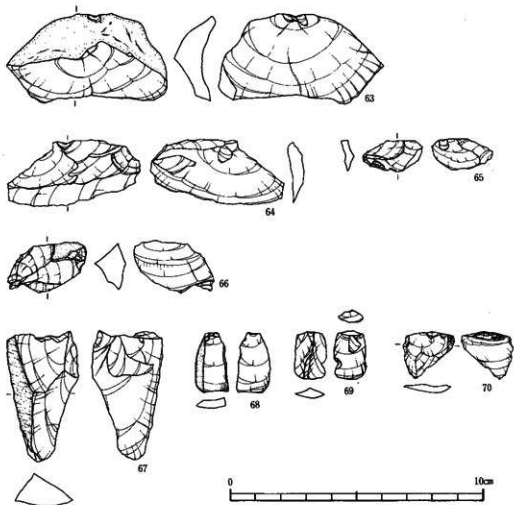
第11図 銅片実測図 (その1)



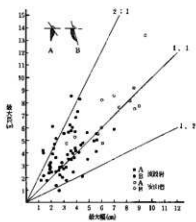
第12図 剝片実測図 (その2)



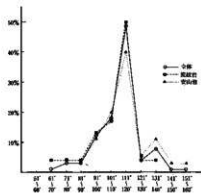
第13図 銅片実測図 (その3)



第14図 制片実測図 (その4)



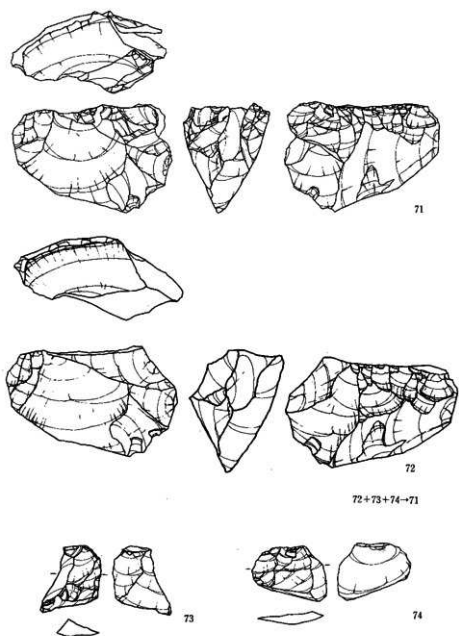
第15図 制片長幅分布図



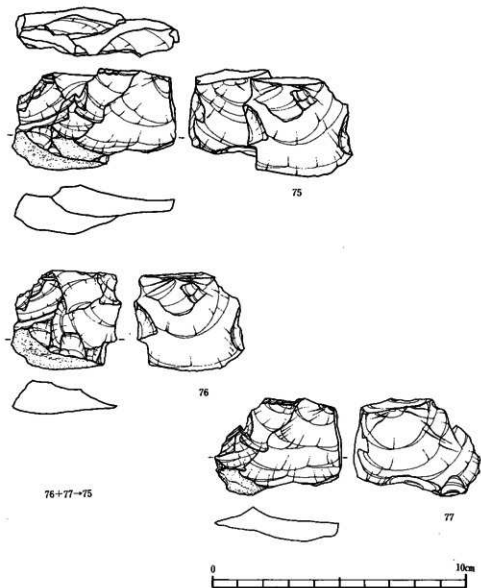
第16図 制片制離角度数分布図

	No	層	調査区	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	図版番号
銅片	38	IV	10C	流紋岩	2.7	1.4	0.5	1.37	11
	39	I	10C	〃	2.2	1.0	0.4	0.94	〃
	40	III	10C	〃	2.7	2.3	0.6	2.85	〃
	41	V	10C	〃	3.5	3.0	0.5	7.09	〃
	42	V	10C	〃	3.9	1.2	1.1	4.85	〃
	43	IV	10B	〃	4.9	2.3	1.1	12.58	〃
	44	III	9D	〃	4.4	3.9	0.7	10.34	〃
	45	III	10C	〃	5.5	3.3	1.3	18.91	〃
	46	IV	10C	〃	5.1	3.5	1.7	24.53	〃
	47	III	9F	〃	5.3	3.0	1.5	17.10	〃
	48	IV	12E	〃	4.2	2.1	0.6	5.28	〃
	49	IV	10B	〃	5.6	4.4	2.0	53.14	12
	50	III	10C	〃	1.9	2.1	0.6	2.43	〃
	51	V	12F	〃	1.7	3.4	0.6	0.99	〃
	52	IV	9D	〃	3.3	4.5	1.3	10.24	〃
	53	III	9D	〃	3.0	2.9	0.9	6.92	〃
	54	IV	10C	〃	3.3	4.3	0.9	13.16	〃
	55	V	10C	〃	2.0	3.6	0.8	4.05	〃
	56	III	10C	安山岩	3.9	5.2	1.4	20.40	〃
	57	IV	9D	流紋岩	1.6	3.6	1.7	6.19	〃
	58	V	10C	〃	7.7	6.7	1.7	116.60	13
	59	V	10C	安山岩	5.6	5.6	0.7	36.50	〃
	60	V	12E	流紋岩	6.9	3.4	1.5	23.85	〃
	61	IV	10B	〃	6.4	3.6	1.3	26.70	〃
	62	IV	9D	〃	3.8	3.5	0.8	1.53	〃
	63	IV	10C	〃	3.6	6.4	1.6	37.33	14
	64	IV	10C	〃	2.7	5.2	0.5	7.45	〃
	65	III	9D	〃	1.2	2.4	0.5	1.15	〃
	66	III	10C	〃	2.2	3.8	1.2	7.15	〃
	67	III	9D	〃	5.2	2.8	1.3	17.23	〃
	68	IV	10B	〃	2.3	1.3	0.3	1.42	〃
	69	V	10C	〃	1.9	1.2	0.4	1.00	〃
	70	V	10C	〃	1.9	2.1	0.3	7.06	〃

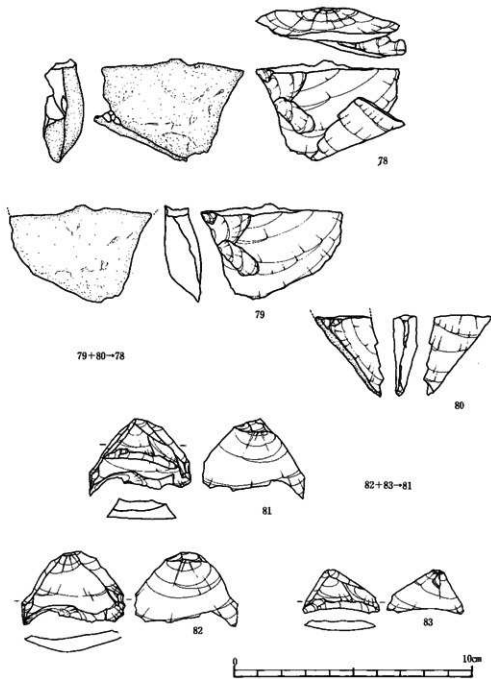
第6表 上下田遺跡出土の銅片計測表



第17図 ブランクと調整削片の接合資料実測図



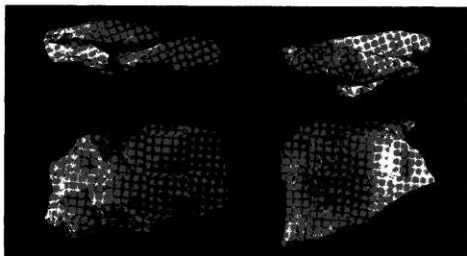
第18図 銅片の接合資料実測図



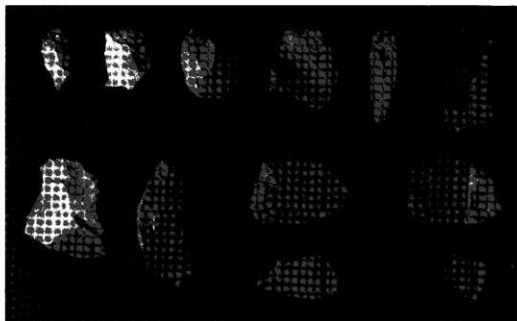
第19図 銅片の接合資料実測図

	No	層	調査区	石 材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	備 考	図版番号
ブランク 銅 片	72	IV	10D	流紋岩	6.30	2.9	4.1	93.00	73,74と接合	17
	73	III	10C	#	2.70	2.3	1.2	4.64		#
	74	IV	10D	#	2.3	3.0	0.5	2.72		#
	76	III	10D	#	4.0	4.2	1.3	25.90	77と接合	18
	77	III	10C	#	3.9	5.0	1.3	22.31		#
	79	III	11E	#	4.1	6.0	1.6	34.20	80と接合	19
	80		表採	#	3.5	2.7	1.0	4.80		#
	82	IV	10D	#	3.1	4.4	0.9	10.22	83と接合	#
	83	IV	10D	#	1.9	3.3	0.5	2.95		#

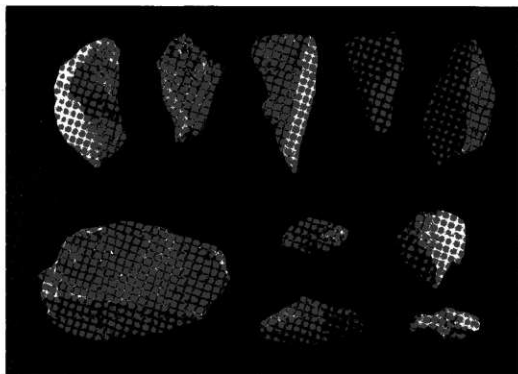
第7表 ブランク・銅片の接合資料計測表



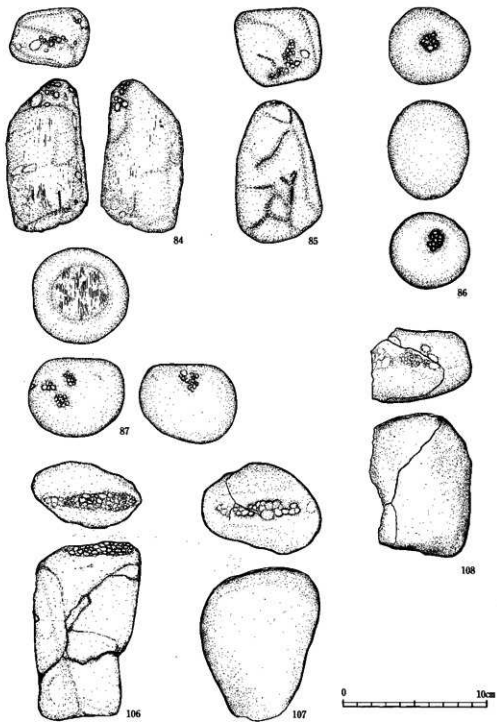
接合資料



薄片 (流紋岩)



薄片 (流紋岩)



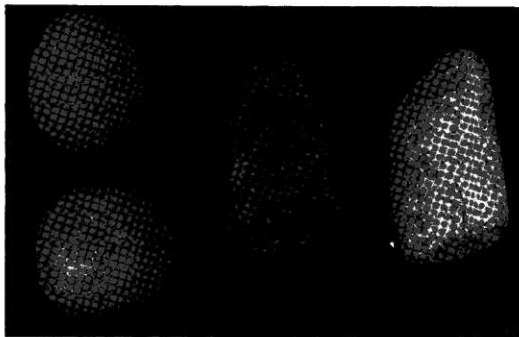
第20圖 敲石・磨石実測圖

	No	層	調査区	石 材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	備 考	図版番号
磨 石	84	V	10B	凝灰岩	10.8	5.6	4.2	363.2	打痕あり	20
	85	IV	9 D	玄武岩	10.0	6.0	5.5	427.0		#
敲 石	86	IV	9 D	#	6.7	6.8	5.4	293.0		#
	87	IV	9 C	安山岩	6.7	6.8	5.4	351.2	擦痕あり	#
	106	IV	9 C	玄武岩	12.3	7.5	4.8	666.0		#
	107	IV	9 D	凝灰岩	10.8	8.3	6.5	707.0		#
	108	IV	10B	#	9.9	7.1	5.3	496.0		#

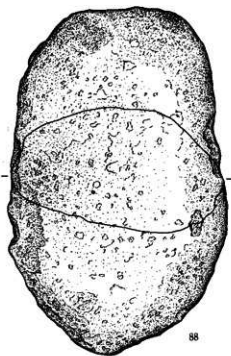
第8表 上下田遺跡出土の磨石・敲石計測表

磨石・敲石

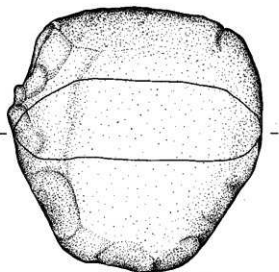
今回の第2次調査で敲石・磨石が9点出土している。第1次においては8点である。磨石・敲石は玄武岩・凝灰岩それに安山岩質の拳大の円礫が利用されている。これらの石器には磨石に使用したためと考えられる擦痕と、敲石として使用したためと考えられる打痕と同時に観察されるものがある。このため、磨石と敲石とは一括してとりあつかった。



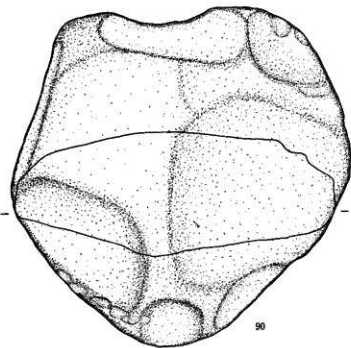
敲石・磨石



88



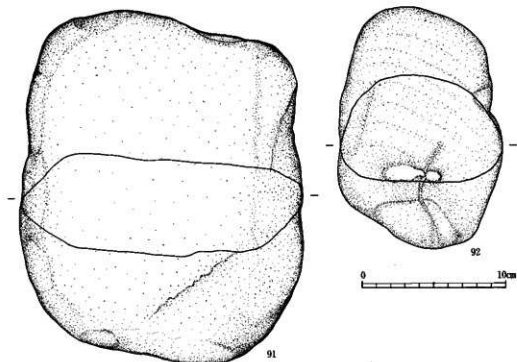
89



90



第21図 台石実測図



第22図 台石実測図

	No.	層	調査区	石 材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(kg)	備 考	図版番号
台 石	88	IV	9 D	玄武岩質	24.6	15.3	8.5	4.60		21
	89	IV	10 B	流紋岩	18.6	17.7	5.9	3.18	原石(?)	//
	90	IV	9 D	凝灰岩質	23.7	23.6	8.7	6.60		//
	91	IV	10 B	凝灰岩質	25.1	19.7	6.8	5.98		22
	92	IV	9 E	流紋岩	17.0	11.5	7.5	1.12	原石(?)	//

第 9 表 上下田遺跡出土の台石計測表

台石

第 2 次調査において台石と考えられる石器が 5 点出土している。形や大きさはそれぞれ異なっているが、長さや幅にたいし厚さがあまりないということで共通している。この比較的扁平で安定した形態を有していることと敲石・磨石などと隣接した出土状況が観察されることを主な理由として台石と考えた。表面に打痕や擦痕などの使用痕が明瞭に残っているものはない。89・92は流紋岩なので原石の可能性もある。

安山岩製の石器群

上下田遺跡の第2次調査において、細石器文化の文化層の下位である第V層を主体に、40点ほどの著しく風化の進んだ安山岩製の石器群が出土した。石器群の数は限られているが、この内訳は尖頭状礫器1点と石核1点、それに剥片が38点である。剥片の中には、尖頭状礫器と接合するもの1点、石核に接合するもの9点が存在する。石核と剥片の接合資料は上下田下層の石器群の平面および垂直分布や、剥片剥離技術を知る上で貴重なデータを提供している。

尖頭状礫器

94 厚味のある不定形な剥片が素材に用いられているようである。剥片の主要剥離面側は両側辺からほぼ全面におよぶ加工が施されている。一方、背面は1側辺からのみ大きな剥離による2次加工が行われており、反対の側面には表皮が大きく残っている。一端は尖頭状に鋭く尖っている。最大長12.5cm、最大幅7.4cm、最大厚さ4.3cmを測り、重さは351gである。

剥片

96～104の剥片はすべて106の石核と接合するものである。図示していない他の安山岩製の剥片もこれらと同様な特徴を持っているので上下田遺跡下層出土の安山岩製の剥片はこれらで代表させることができよう。以下、特徴的なものを挙げて若干の説明を行いたい。

96 最大の剥片で、長さ13.6cm、幅8.6cm、厚さ3.5cmを測ることができる。縦に長い剥片で、打面の大部分は欠損し、一部がわずかに残っている。背面の打面近くに、この剥片が剥離される以前の剥離面が1つあり、その他は表皮が大きく残っている。

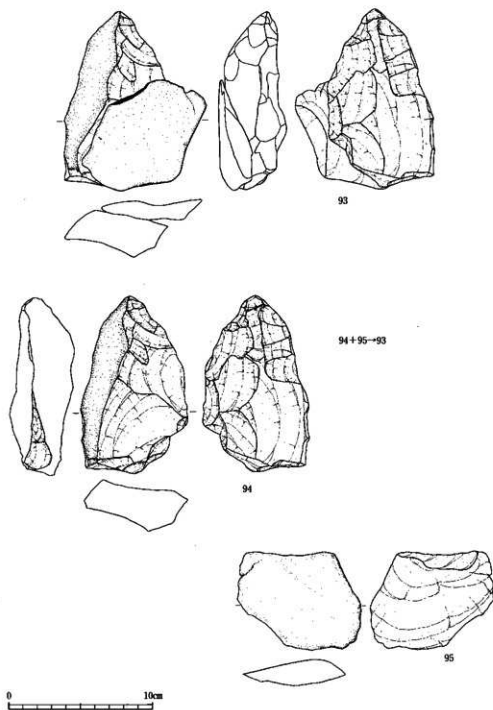
97～99 斜め方向に剥離が行われている剥片であり、厚味のある97・98は背面の一部に表皮を残している。これに対して99は両面とも1枚の幅の広い剥離面がみられる。打面が明瞭に残っているのは98のみで、他の2点は欠損している。

100～102・104 長さとは幅がほぼ等しい横割ぎに近い剥片である。背面にみられる2～3面の剥離の方向は主要剥離面の方向と同様なものの他、下端からや横方向からのもの存在し、あらゆる方向から剥片剥離が行われている。

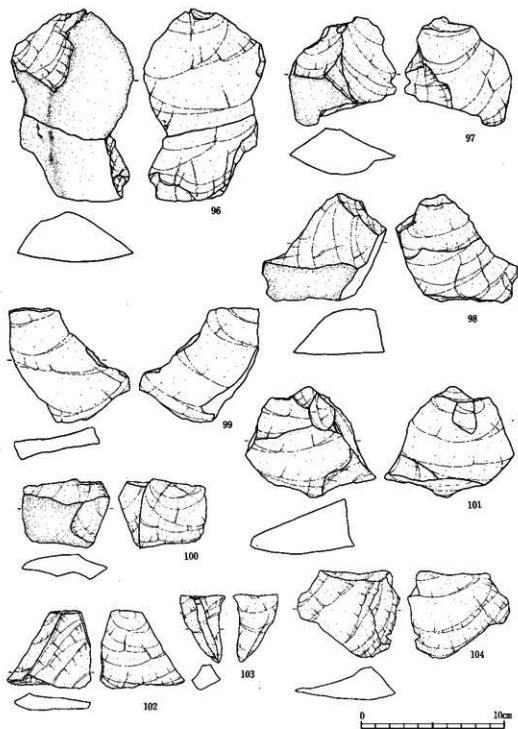
103 もっとも小形でしかも形が整っている剥片である。縦長で、大きな平坦な打面をもち、打面と反対の一端は尖っている。背面には3枚の縦に長い剥離面があり、その剥離の方向は上端からのものと下端からのものがある。

石核

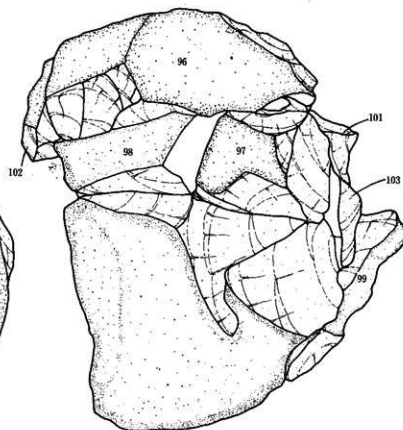
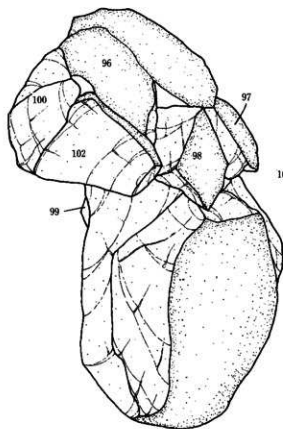
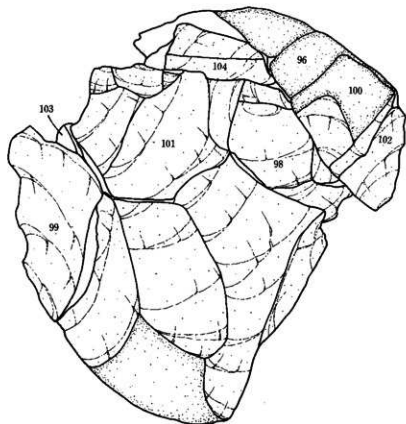
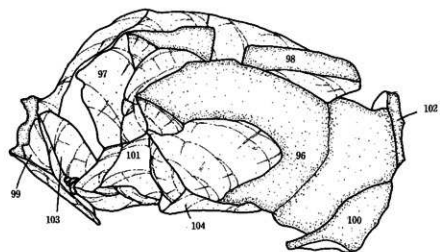
105 安山岩製の石核はこの1点のみである。表面の風化が進んでいるために、石核に残された剥離面からのみでは剥離作業の観察は困難であるが、先に述べた剥片が接合するためある程度まで復元することができる。打面の部位は一定してなく、先に剥離を行った剥離面を打面に



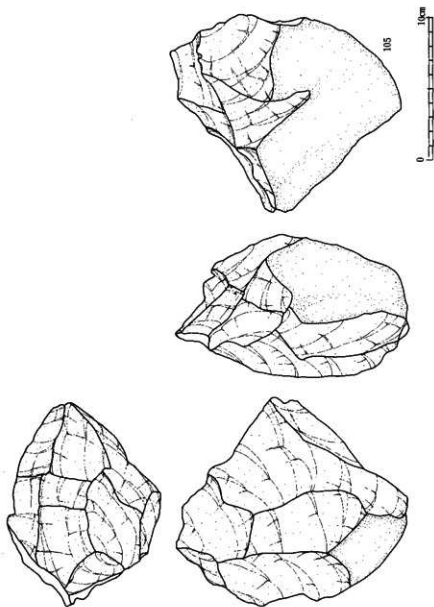
第23図 尖頭状礫器・製片の接合資料実測図



第24图 剥片实例图(安山岩)



第25図 石核・鱗片の接合資料実測図 (安山岩)

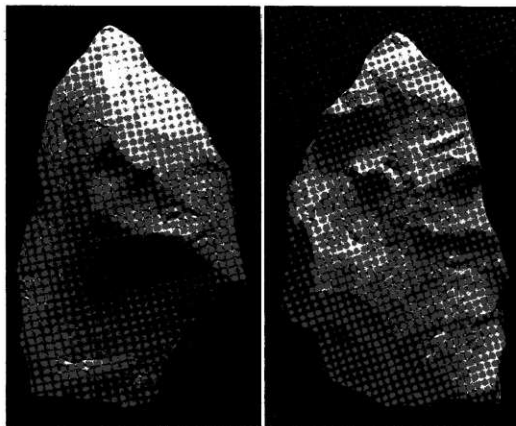


第26図 石槌実測図 (安山岩)

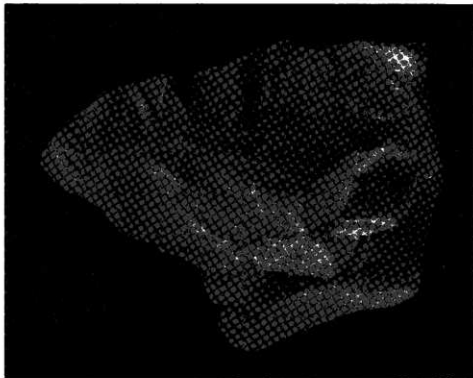
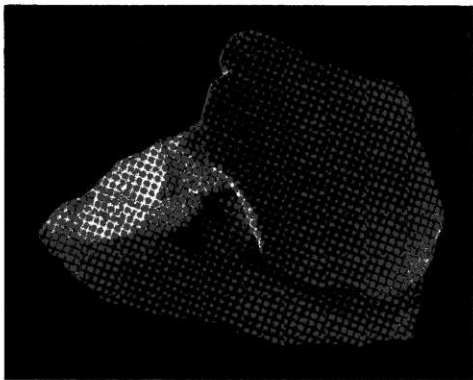
して次の剥片をとっていく方法を基本としているようであり、最終的には大形のチョッピング
 トウル状を呈する。しかし、中には自然面を打面として、まったく異なる方向からの剥離が行
 われている。大野川流域の後期旧石器文化で普遍的にみられる流紋岩製の縦長あるいは横長の
 剥片を剥離した石核とは異なるものである。

	No.	層	調査区	石 材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	備 考	図版番号	
尖頭状礫器	94	V	10C	安山岩	12.5	7.4	4.3	351.00	95と接合	23	
剥 片	95	V	10B	〃	6.7	8.7	1.8	131.20	〃	〃	
	96	V	10B	〃	13.6	8.6	3.5	489.00	105と接合	24	
	97	V	10B	〃	7.7	7.5	3.3	169.00	〃	〃	
	98	V	10C	〃	7.6	8.8	3.2	228.67	〃	〃	
	99	V	10B	〃	8.1	8.9	2.2	94.05	〃	〃	
	100	V	10B	〃	4.8	6.1	1.2	69.75	〃	〃	
	101	V	10B	〃	7.8	9.2	3.9	185.54	〃	〃	
	102	V	10C	〃	5.5	5.8	1.2	38.06	〃	〃	
	103	V	10C	〃	4.7	3.7	1.7	25.60	〃	〃	
	104	V	10C	〃	6.1	7.2	2.3	85.15	〃	〃	
	石 核	105	V	10B	〃	16.1	13.8	10.1	2180.00	〃	26

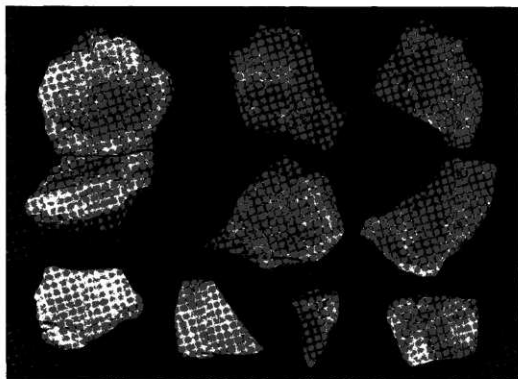
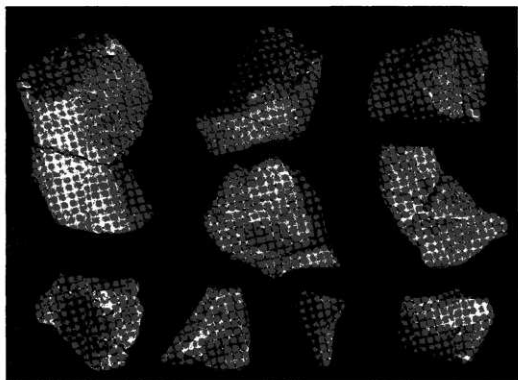
第10表 尖頭状礫器・石核・剥片の接合資料計測表



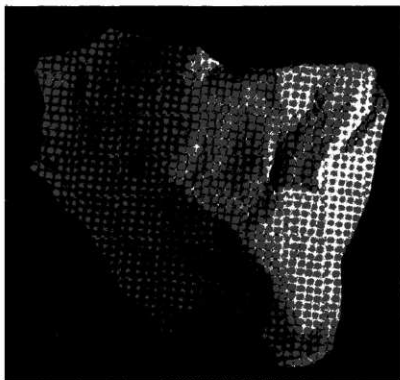
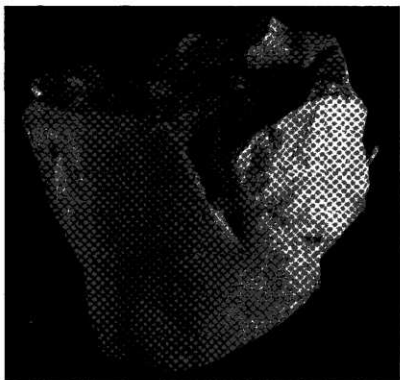
尖頭状礫器



特異な金属結晶の片・網・結晶状態の観察

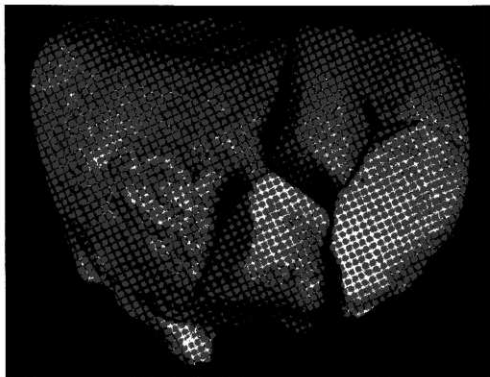
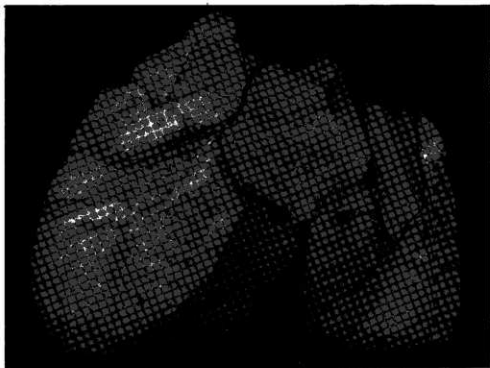


安山岩製の刺片



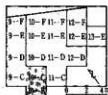
安山岩製の石核

安山岩製の石積・銅片の接合資料



9 D | 10 D
9 C | 10 C

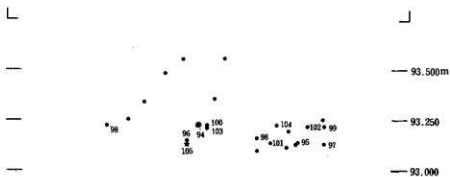
10 D | 11 D
10 C | 11 C



- ☆ 石核
- 尖頭狀石器
- 刮片・碎片

9 C | 10 C
9 B | 10 B

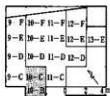
10 C | 11 C
10 B | 11 B



第27図 安山岩製遺物出土状況

9 D | 10 D
9 C | 10 C

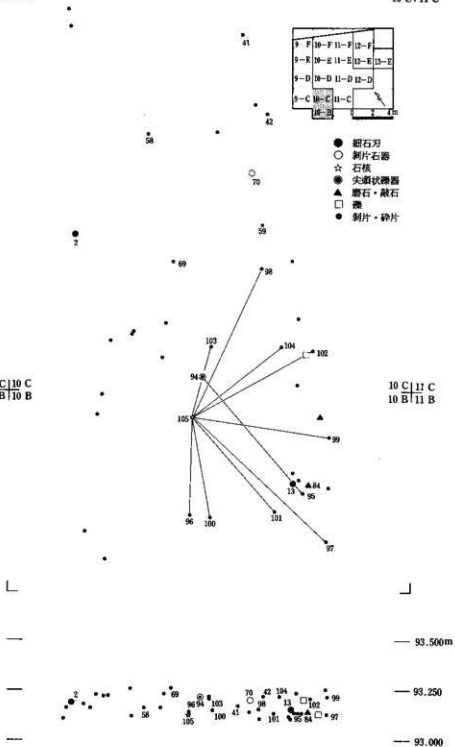
10 D | 11 D
10 C | 11 C



- 磨石刃
- 剥片石器
- ☆ 石核
- 尖頭状石器
- ▲ 磨石・敲石
- 礎
- 剥片・碎片

9 C | 10 C
9 B | 10 B

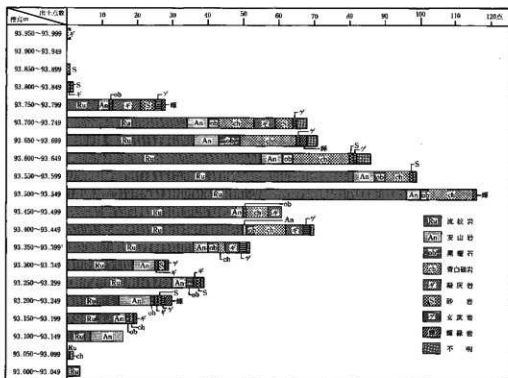
10 C | 11 C
10 B | 11 B



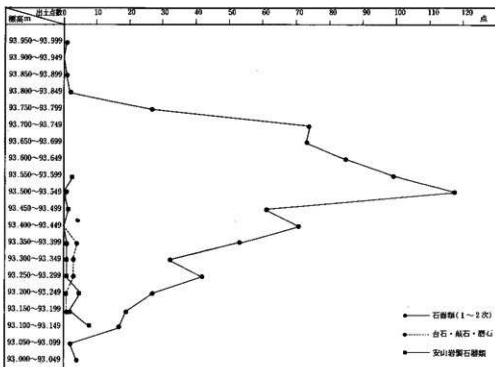
第28図 第V層の遺物出土状況と接合関係

調査区	遺石方 スゴ-8	削器 探密	矢頭部 彫出	2次 加工	使用痕	磨石 磨石	磨石 フシク	磨石 砕片	鏃 鏃	石核	尖頭状 鏃	鏃	白石	不明	石鏃	土器	計			
																		9 C	9 D	9 E
9 C	1		1			3		9	1								15			
9 D	6	1		1		3		59	1				2			73				
9 E								2	1				1			4				
9 F			1					3								4				
10 B	5					4		31	1	1			2			44				
10 C	9	2	3		1	2	1	56	3		1	1				78				
10 D	18	2	3		2	3	3	111	4				1			148				
10 E	4	1	1		1	1	4	25	9						1	47				
10 F	2		4					19	2							28				
11 C	4					2		17	6						2	31				
11 D	2					2		52	4	3				2	1	7	73			
11 E	12		1		1	3	2	88	22						1	1	131			
11 F	11	1	2	1			3	69	9	1				3	1	1	102			
12 D	2		1			2		24	4	1						3	37			
12 E	1		1					9									11			
12 F								3									3			
計	77	7	17	2	2	5	14	17	7	1	576	67	6	1	1	6	5	4	14	829

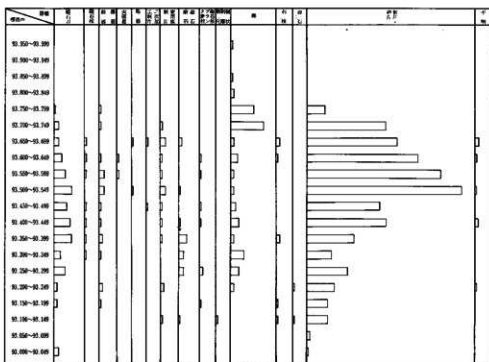
第11表 上下田遺跡各調査区出土の遺物数 (第1次・第2次)



第29図 石材の垂直分布図



第30図 遺物の垂直分布図 (第1・2次調査)



第31図 遺物の組成と垂直分布図 (第1・2次調査)

上下田遺跡の出土遺物一覧

Ⅰ・Ⅱ層

層別 調査区	磨石別 スボール	磨石核	削器 掻器	尖頭器	彫器	2次 加工	使用痕	敲石 磨石	磨石 フナツ	磨石 剥片	剥片 砕片	礫	石核	尖頭状 礫器	礫器	台石	不明	石鏃	土器	計	
9C																					
9D																					
9E																					
9F																					
10B																					
10C											1										1
10D	3						1				35										39
10E	4		1				1				9	8						1			24
10F											6	2									8
11C								1			7	5							2		15
11D											24	1	2				2		2		31
11E	4		1								19	22						1	1		48
11F	1							1			8	8						1			19
12D	1		1				1				13	4								2	22
12E																					
12F																					
計	13		3				3	2			122	50	2				2	3	7		207

Ⅲ層

層別 調査区	磨石別 スボール	磨石核	削器 掻器	尖頭器	彫器	2次 加工	使用痕	敲石 磨石	磨石 フナツ	磨石 剥片	剥片 砕片	礫	石核	尖頭状 礫器	礫器	台石	不明	石鏃	土器	計	
9C																					
9D	4	1			1						38										44
9E											1										1
9F			1								2										3
10B	3										4										7
10C	1	1	3						1		22										28
10D	4	1					2		1		39	1									48
10E					1						5										6
10F	1		3								9										13
11C	1							1			9	1									12
11D	2										24	2									34
11E	3					1	2		1		35										42
11F	6	1	1	1				1			48		1				2		1		62
12D											9										9
12E	1		1																		2
12F																					
計	26	4	9	1	2	1	4	2	3		245	4	1				2	1	6		311

IV層

層別 調査区	砥石		削器 搔器	尖頭器	彫器	2次 加工	使用鏡	敲石 磨石	磨石 フック	鑿状 削片	削片 碎片	礫	石核	尖頭状 礫器	礫器	台石	不明	石鏡	土器	計	
	入形-4	磨石核																			
9C	1			1				3			9	1									15
9D	2							3			21	1				2					29
9E											1	2				1					3
9F											1										1
10B	1							2			13	1				2					19
10C	7	1				1	1				12	2			1						25
10D	11	1	3			2		2	1	36	3					1					61
10E		1				1	3				11	1									17
10F	1		1						1	4											7
11C	3									1											4
11D								2		4	1	1									8
11E	5						1		1	34											41
11F	4		1					1		13							1				21
12D	1						1			2		1								1	6
12E										7											7
12F										1											1
計	36	3	5	1		4	6	11	4	1	170	12	2		1	6	1		1		265

V層

層別 調査区	砥石		削器 搔器	尖頭器	彫器	2次 加工	使用鏡	敲石 磨石	磨石 フック	鑿状 削片	削片 碎片	礫	石核	尖頭状 礫器	礫器	台石	不明	石鏡	土器	計	
	入形-4	磨石核																			
9C																					
9D																					
9E																					
9F																					
10B	1							2		14			1								18
10C	1						1			20		1		1							24
10D																					
10E																					
10F																					
11C																					
11D																					
11E																					
11F																					
12D																					
12E										2											2
12F										2											2
計	2						1	2		38		1	1	1							46

上下田 I の石器群（細石器文化）

上下田遺跡の主要な遺物は第Ⅲ層から第Ⅳ層上部にかけて出土している細石器文化の石器群である。この細石器文化の代表的なものとして14点の細石核が出土している。そこでこれらの資料を分析することによって、上下田遺跡の細石器文化の特徴を抽出して、大野川流域での位置づけを行うことにしたい。

まず、上下田遺跡出土の細石核を素材の用いられ方、側面の調整、打面のあり方、それに全体的な体形などを基準にして分類する。

第Ⅰ類、舟底状に近い体形を呈するが、細石刃の剥離作業面(正面)の高さと幅がほぼ同じで、全体的にずんぐりしている。打面は不整形な長方形を呈し、細石刃の剥離作業が進んだ残核に近いものでは隅丸の方形となる。正面観は方形もしくはやや長方形ぎみで、下端は「U」字形ないしは角度の大きな「V」字状を呈する。側面の調整は主として細石核の打面からの大きな剥離によって施されているが、逆の方向から調整剥離が行われているものも存在する。細石核の打面は1回の大きな剥離による平坦打面で、細石刃剥離作業のための打面の調整は認められない。細石刃剥離作業面と打面との角度は直角に近い値を示している。石材は大野川流域の後期旧石器時代の石器群に普遍的に用いられている流紋岩である。この第Ⅰ類はこれまで宮崎県中部から大分県中部にかけてのいわゆる東九州において注目されている「船野型細石核」と軌を一にするものであり、上下田遺跡の細石核の主体をなしている。

この第Ⅰ類は細石核の素材の用い方を分類基準に加えれば、さらに2類に細分できる。

第Ⅰ類A 拳大の円礫の一端に打剝を施して平坦な剥離面を作出する。その面が打面とされ、細石核の素材となる厚味のある剝片を剥離する。この厚味のある剝片の主要剥離面は細石核の打面としてそのまま利用され、細石核側面の調整剥離が施され全体の形が整えられる。細石刃の剥離作業はその一端から行われる。

第Ⅰ類B 拳大の円礫から比較的厚味のある剝片を作出してそれを細石核の素材に用いる点は第Ⅰ類Aと同様であるが、その剝片の主要剥離面を打面として用いるのではなく、細石核の一方の側面として利用するのである。この細石核の側面調整は主要剥離面側の1面ではほとんど行われず、その反対の面に集中する。この第Ⅰ類Bは東九州に特徴的な第Ⅰ類Aの細石核に共伴して少量みられる。

第Ⅱ類 全体的な体形は第Ⅰ類よりもさらに舟底状の近い形を呈しており、細石刃の剥離作業面の高さがその幅より勝る傾向がみられ、正面観も細身の「V」字状を呈す。これらの外観上の形態以上に第Ⅰ類と異なる点がいくつか指適できる。まず、打面の細調整の存在である。細石刃剥離作業面から背面の方向、一側面から他側面へ向けて行われる。また打面は作業面から背面に向かって大きく傾斜することもあげられるであろう。細石核の素材については、Ⅰ類と同様に比較的厚味のある剝片を用いているが、第Ⅰ類の大部分を占める第Ⅰ類Aのように、剝片の主要剥離面を打面にするのではなく、第Ⅰ類Bと同じように側面として利用している。

石材はⅠ類と同様流紋岩が使用されるほか、黒曜石やチャートが使用されることがある。

以上が上下田遺跡の上層から出土した細石核の特徴と考えられるものである。これらの細石核について、大野川流域で出土している細石核との対比を行ってみる。

まず、上下田遺跡の主体をなす第Ⅰ類の細石核が出土している遺跡は、大野川中流域にみられる。大野郡大野町宮地前遺跡、小牧遺跡、松木遺跡、片島遺跡、安面遺跡、牧上遺跡などがある。もっとも、これらの遺跡のうち、発掘調査が行われているのは、宮地前・小牧・松木の3遺跡のみであり、ほかは表採資料によって確認されている。

これらの諸遺跡の石器群はいずれも流紋岩あるいはホルンフェルスに用いている。また石器組成に流紋岩の比較的大形で厚味のある剥片を素材したスクレイパーがみられる。このスクレイパーは1側辺あるいは2側辺に急角度の鋭利な刃部を持ったみごとなものであり、第Ⅰ類細石核に共伴する代表的な石器とみなすことができる。

次に、大野川流域で第Ⅱ類とした細石核およびそれに近似すると判断できる細石核を出土している遺跡としては、大野川上流域の直入郡萩町の政所馬渡遺跡、下流域の大分市雄城台遺跡、大野川の主流からはずれた大野郡野津町の田良原遺跡、奥畑遺跡、それに上下田遺跡に近接する百枝小学校遺跡などを挙げることができよう。

これら諸遺跡の状況は必ずしも良好と言えず、出土層位や石器組成について今一步明確さに欠けている。ただ全体的な傾向として、遺跡の所在が第Ⅰ類細石核を出土している諸遺跡のように、大野川の中流域に集中してなく、大野川の上流域や下流域、またその周辺というように、大野川流域のより広い範囲におよんでいるのである。また、第Ⅰ類の石材が流紋岩に限定されていたのに対し、第Ⅱ類では流紋岩のほかに、黒曜石・チャートなどが使用されており、石材の面でバリエーションが認められる。さらに注目すべき点として、熊本県に近接する政所馬渡遺跡では、伊万里市の腰岳産と判断できる黒曜石を用いた第Ⅱ類とするよりむしろ典型的な舟底形細石核が出土しているのである。しかもこの細石核には小破片であるが無文土器を伴っているのである。大野川流域で土器が共伴する細石器文化の唯一の例である。

上下田遺跡で出土している細石核の第Ⅰ類と第Ⅱ類では、細石核それ自体の形態は無論のこと、石材の違い、石器組成さらに大野川流域での分布のあり方など、異なった様相がうかがえるのである。このことは第Ⅰ類の細石核を主体にする細石器文化と第Ⅱ類のそれとの時間的な差異を予想させるように思えるのである。

大野川流域で細石刃・細石核を出土している遺跡は10数箇所を数えることができるが、第Ⅰ類と第Ⅱ類の時間的関係を層位的に示す遺跡は知られていない。そこで両者の時間的関係を知る手がかりとしては、先にあげた両者の相様の違いにたよらざるを得ないのである。

第Ⅰ類細石核は宮崎県中部から大分県中部にかけての、いわゆる東九州地域に顕著な「船野型細石核」と考えられたものである。一方、第Ⅱ類は「福井型細石核」そのものとは言えないかも知れないが、それに極めて近いものと考えられよう。この第Ⅱ類の細石核は、その形態、

製作技術、石材、それに政所馬渡遺跡での無文土器の共伴などから、細石器文化の中での新しい時期を示唆している。これらのことから、基本的には第Ⅰ類は第Ⅱ類に先行すると考えられ、両者に時間的推移が予想される。

上下田遺跡の上層の文化層からは、第Ⅰ類を主体に少量の第Ⅱ類が出土している。このことは、2つの時間を異にする文化層が複合している可能性が考えられる。しかしこの点については、石器群の平面分布・垂直分布、それに接合資料などの検討・分析による限り、1つの文化層として把握されるのである。結局、上下田遺跡の細石器文化は、第Ⅰ類で代表される時期から第Ⅱ類の時期への過渡的な位置を示すものと判断できよう。

上下田Ⅱの石器群

第2次発掘調査において、細石器文化の包含層より下層の第Ⅴ層を主体に安山岩製の石器と石核・剥片が40点余り出土した。これらの石器群は細石器文化の石器群とすべての面で異なった様相を持っており、細石器文化の石器群とは明らかに違う石器群である。

まず、下層の石器群の出土層位は第Ⅴ層、当遺跡は大野川に接する浅い谷状の台地に立地している関係上、火山降下堆積物の発達が乏しいため、始良丹沢火山灰（AT）や黒色帯（暗色帯）が見られない。それでこの第Ⅴ層は大野川中流域のソフトロームから礫層、あるいは久住起源の軽石（KJP₁）までの基本層序との対比が困難である。しかしながら、この第Ⅴ層の土質や色、それに安山岩質の礫が含まれていることなどの第Ⅴ層の顔つきは、ソフトロームから礫層あるいはKJP₁までのいずれの層にも対比することはできないのである。むしろ、阿蘇4溶結凝灰岩（Aso-4）の最上部が風化し粘度化した土層にもっとも近似している。実際、第Ⅴ層の下部から第Ⅵ層にかけて、凝灰岩の風化した礫が次第に多くなっていく状況が観察された。今後、大野川中流域のどこかの地点で、ATや礫層、KJP₁など鍵になる層と共に上下田遺跡の第Ⅴ層の明確な層位的な位置づけを行わなければならないであろうが、現時点では、第Ⅴ層の層位はAso-4最上面の粘土層中と考えておきたい。

次に、出土した石器群については前に述べたとおりであるが、尖頭状礫器1点、石核1点、それに剥片が38点である。尖頭状礫器は大形で厚味のある不定形な剥片が素材に用いられている。加工は主要剥離面側では両側辺から、背面は1側辺からそれぞれ粗い剥離で尖頭状に整えられており、一部に表皮を残している。石核は子供の頭大の大形のもので、周辺に不規則な大きな剥離面を残しており、この剥離面には9点の剥片が接合する。接合資料の剥離による限り、打面の位置および剥離方向は必ずしも定まらずに、アトランダムに剥離を行っている。大野川流域で、流紋岩あるいはホルンフェルスを用いた石核にみられる剥片剥離技術とは明らかに異なっている。剥片は概して大形でしかも特に厚味があり、縦に長いもの、横に長いもの、

それらの中間的なものなど、一定してない。剝片の打面は自然面をそのまま用いたものと、1回の大きな剝離による平坦打面の両者が存在する。結局、石核で観察された通り、ナイフ形石器や細石刃・細石核などと共伴する流紋岩製の剝片とは区別される。

現在までのところ、大野川流域での最古の石器群と考えられるものに、丹生遺跡群と岩戸第Ⅲ文化層を挙げることができるであろう。丹生遺跡の出土石器については、従来からその位置づけについて多くの問題点が指適されながらも、今だに明確さを欠いているのは事実である。しかしながら、丹生遺跡発見の石器群の中には、縄文時代早期や後期旧石器時代の所産として考え難いものが含まれている。また、上下田遺跡下層に類似したものが認められ、上下田Ⅱの石器群と共に新たに丹生遺跡出土の石器群の検討が必要と思われる。一方、岩戸第Ⅲ文化層の石器群については、資料数が少なくその実体は必ずしも明らかになっていないが、石材に流紋岩あるいはそれに類似したものが用いられ、しかも縦長剝片の剝離技術が存在している。この特徴は上下田遺跡下層の石器群には認めることができないものである。さらに、岩戸遺跡第Ⅲ文化層から第Ⅰ文化層、また岩戸K文化から岩戸C文化のどの文化層の石器群とも異なっているのである。

以上のように、上下田遺跡下層出土石器群は、大野川流域の後期旧石器文化の石器群とは石材、剝片剝離技術の違い、ナイフ形石器のないこと、さらに層位的にAso-4最上面と考えられる粘土層中に包含層が存在することなどから、後期旧石器文化に先行する石器群としての位置づけを行っておきたい。

主要参考文献

- 麻生優 (1965)「細石器文化」日本の考古学 1
- 鎌木義昌・芹沢長介 (1965)「長崎県福井岩陰」考古学集刊 3—1
- 古代学協会 (1968)「大分県丹生遺跡発掘調査概報総括編」
- 鈴木忠司 (1971)「野岳遺跡の細石器と西南日本における細石刃文化」古代文化23—8
- 渡辺誠編 (1973)「大分県大野町宮地前遺跡発掘調査概報」平安博物館
- 橋昌信 (1973)「九州における細石器文化—細石器の分類と編年試論」考古学論叢 1
- 芹沢長介編 (1978)「岩戸」東北大学考古学資料集第 2 冊
- 橋昌信 (1979)「九州地方の細石器文化」駿台史学 47
- 〃 (1979)「東九州における細石器—船野型細石器—」考古学ジャーナル 167
- 坂田邦洋・町田洋・内藤芳篤 (1980)「大分県岩戸遺跡」
- 橋昌信 (1981)「大分県上下田遺跡発掘調査報告書」別府大学付属博物館
- 賀川光夫・下村悟史・他 (1982)「政所馬渡」別府大学付属博物館

あとがき

上下田遺跡の発掘調査は別府大学付属博物館の調査研究活動の 1 つである「大野川流域における先史時代の調査研究」の一環として実施したものである。第 1 次調査は昭和 55 年に、そして第 2 次調査は昭和 56 年 3 月に実施した。第 1 調査の成果については付属博物館で「大分県上下田遺跡発掘調査報告書」としてすでに刊行している。なお、第 2 次調査のこの報告書では、第 1 次調査の報告書がなくても、上下田遺跡についての理解ができるようにとの配慮から一部重複させている。

第 2 次調査の実施にあたっては、前回と同様遺跡の土地管理者である大分県企業局局長加賀孝一氏ならびに大野川発電所所長首藤功氏にお世話になった。

発掘調査の参加者は、別府大学史学科考古学専攻生である道上康仁(現広島県文化財調査センター)、栗原憲児(現大分市社会教育課調査員)、佐伯治、小林恭子、桜井直美、土居和幸、最上敏の諸氏である。また整理には小林、土居、前嶋秀張、中村仁、辻哲也、田中正弘の考古学専攻生があたってくれた。

以上の方々の協力によって調査ならびに整理が行われたことを銘記すると共に感謝の意をあらわしたい。

昭和 58 年 2 月

別府大学文学部 橋 昌 信

大分県上下田遺跡第2次発掘調査報告書

昭和58年2月15日 印刷
昭和58年2月20日 発行

著者 橋 昌 信
編集者 橋 昌 信
発行所 別府大学付属博物館
別府市北石垣82

印刷所 佐伯印刷株式会社
大分市古国府1155の1



